俺たち、ベーコンレタス部！

10Time

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺たち、ベーコンレタス部！

【Ｎコード】
Ｎ９３４３Ｚ

【作者名】
１０Ｔｉｍｅ

【あらすじ】
とある田舎町の高校に、新しくできた部がある。部員数は、５名――。部に入るには、ある性質を持っていなくてはならない。この５名は、その、ある共通の性質を持っている。そんな部の日常的物語が今、スタートする。

1．プロローグは、俺に任せろ！

とある田舎町にある高等学校。
――黄峰高校（おうほうこうこう）。

そこに、帰宅部だった者同士で創られた新しい部がある。　メンバーは、ある性質を持っており、その性質を持っている者しか入部できないことになっている。　しかし、その性質を持っているからといって加入しようとする人は、まずいない。

なぜかって？

それはこのあとに出てくるこの部活の名前を知ればわかるさ。
ま、それは置いといて。
二階のプレート看板のない小部屋。　ずっと使われていなかったその空き室に三人の生徒が集っている。

「はぁー」
「物語の始まりはその溜息から始まった」

溜息を吐いた男はデスクにうつ伏せになると、そばにいた男がそう口にした。

「なに、言ってんの？」
「この可愛い顔の裏にあるツンツンとした態度をとる男の名前は、池貝爽太（いけがいそうた）。彼はこの部のキャプテンともいえる存在である。年齢十六歳。身長百六十三センチ。Ａ型。趣味は音楽鑑賞、テニス、人間観察。特技はその可愛い顔を使って色々な男を落とす」
「んなワケあるかっ！」

自分の特技に納得のできなかった爽太は、目の前にあるデスクを思い切り叩く。

「まぁまぁ落ち着けって」

そんな二人のやり取りをそばでニヤつきながら見ている男がいる。

そう、

「彼の名は、布野瑞輝（ふのみずき）。年齢十六歳。身長百六十八センチ。A型。趣味は二次元一筋らしい。特技は妄想。俺たちと同じ部の仲間である。彼曰く、自称腐男子だそうだ」

腐男子（ふだんし）って――？

そうだなぁ……。　分からない奴はウィ〇ペディアというサイトを参照してくれ！

「そしてこの俺。クールで超イケメンなこの俺の名は！」

その時、部屋のドアが開いた。

入ってきたのはショートの黒髪で高身長な男。　たれ目をしているが、その人気は芸能人をも超える。

「三人とも早いな」

「ってお前！　空気嫁このKY（ケーワイ）ッ！」

部屋に入るなり突然KYと怒鳴られて男にはワケが分からないようだ。　しかし、男は普段通りにスクールバッグをデスクに置いて爽太の隣席に腰を掛け、本を読み始める。

「まぁこういうのは仕方ないよな。よくある展開だ。さぁ気を取り直して、」

ナレーターの男が再開しようとしたとき、バタバタと大きな足音を立てながら、女子生徒が部屋へ駆けてきた。

急いでいたからか、その呼吸は大きく乱れている。

「ね、ねぇ……。やば、やばいニュース……。ビッグニュースよ」

「この女。腐女子(ふじょし)である」

「腐女子じゃなくて、藤吉(ふじよし)よ！　聞いて、E組の沖田君と安達君が付き合ってるんだって！」

女が興奮しながら話す中、爽太はツンとした口調で口を開く。

「知ってる」

「同じく」

爽太の隣りに座っている男も同意する。

「ナノハちゃん遅いねぇ。僕の方が情報早かったみたい。フフフ」

瑞輝は自分と同類の女に勝ったことに、喜びの気持ちを抑えきれなかったようだ。

すると、女は細くした目でナレーターの男に顔を向ける。

「それじゃあ、あんたも？」

「当たり前だろ。俺E組だし」

女はそれを聞くと、床に膝をついた。

「なんなのよ、もぉ〜」

「この女の名前は、藤吉奈乃葉（ふじよしなのは）。趣味、特技は瑞輝と殆ど同じ。違うっていうと性別くらい？　なんにせよ、奈乃葉もこの部の一員である」

「なに言ってんのよ？」

「少し順番が変わったが、この爽太の隣りに座っている男の名前は、枇榔葵（びろうあおい）。年齢十七歳。身長百八十四センチ。趣味はサッカー。特技もサッカー？　ルックスが良すぎて他校の話題にもなり、ファンクラブもできる程のクールボーイだ」

「だからなに言ってんのって言ってんでしょ！」

「そして最後にこの俺！　超」

「超イケメンでもクールでもない見た目ギャル系男子、加賀山虎（かがやまたいが）。十六歳。身長百七十七センチ、B型。趣味は男観察、男をナンパする、自分が男好きだと堂々と公表すること。特技、男から振られる」

「って、爽太！　なに勝手に俺のナレーションすんだよ！」

「語り手が自分の説明するのもどうかなぁと思ってさ。本当のこと言ってみた」

「俺どんだけ酷ェ言われようだ……」

そんなこんなで俺たち部員五人の説明が終了した。

帰宅部で創られたこの部の部員は、全員が二年生である。活動内容は未だに決まっていない。つい一週間前にできたばかりだからだ。

なぜ決まってないのに部が出来たのかって？　良い質問だ。

簡単に説明すると、この部活はまだ正式に部として認められていない。途中段階にいるのだ。

それじゃあこの一週間、なにしてたって？　それはこれからわかることさ。

あー、スイマセン。なんか、説明が面倒になってきたからそろそろ次いってもいいっスか？　プロローグってもなに説明すればいいのか分からないんだわぁ。俺、成績オール２ですから。

そんなこと誰も聞いてない？　さっさと次いけ？

ははーん。そんなこと言われちゃ俺も長話したくなっちゃうよ。てへっ。

「さっさと終わらせろ！」

「爽太は、虎の頭を思い切り叩いた」

二年生の帰宅部で創られたこの部の名前は、ベーコンレタス部。略して【ＢＬ部】

だからなのか、入部希望する人がいない。そもそも活動内容がまだ決まっていなかった。

そしてこれから、この部活で起こるさまざまな物語が始まる――。

2．プロローグの反省

「瑞輝が担当した方が分かりやすかったと思う」

デスクに頬杖をついている爽太がそう口にした。

「そう？　僕でも二人が登場してきたら詰んでいたと思うよ」

彼らは今、部活の説明の反省をしている。瑞輝の言う二人とは、途中から部屋に入ってきた葵と奈乃葉のことだ。

「そうだぜ爽太。俺だってあのとき枇榔に邪魔されなかったらちゃんと説明できてたさ！」

「葵は仕方ないじゃん。てか最後のやる気の無さは一体何なんだよ？　それに、登場人物を一気に説明しちゃって、絶対名前覚られてないよ」

「仕方ねぇだろ。こう一気にキャラが全員登場されちゃさあ」

「しかもセリフが多くてト書きが少ないし」

「だから仕方ない……、てかト書きなくても伝わるっしょ！」

「それじゃあ読者が減るから」

「だったらいっそのことノベルゲームにすっか？！」

「こんな題名の時点で買う人物は決まってるからな。売れるわけがない」

「ちょっとあんたたち、なに勝手に話し進めてんのよ！」

二人で話を進めていることに気が乗らない奈乃葉が口を出す。

「お、やっと説明来たな」

「はあ？　ねぇ、さっきから気になってたんだけど、あんたたち一体なんの話してんの？」

「なんのって……。なんの話してるんだ？」

「俺に訊かれたって……。つか、これじゃあ俺かお前どっちが話してるのか分からないだろ？」

「お前は爽太だろ？」

「そうだが、いちいちそう言うのも面倒だろ」

「じゃあセリフの上に頭文字をつけるべ！」

ソ「こう、か？」

タ「そうそう。これだとわかりやすいだろ！？」

「だから、何の話をしてるのかって聞いてんの！」

奈乃葉は怒った口調で言う。

タ「ＫＹだな」
ソ「ああ、ＫＹだ」

プチンッ。

そのとき、何かの切れる音が聞こえた。

「人の話を聞けええぇぇぇぇ！！！！」

ソ&タ「ぐふはぁッ！！」

☆　☆　☆

「てなことで語り手はこの僕、瑞輝がすることになりました」
「そんなことはいいから早く反省しようぜぇ？」
先程関係のない話をしていた虎が調子に乗ってそう口にする。
「えーと、まずはどこから話せばいいのだろう」

瑞輝は困った様子で、爽太の顔を見つめる。いや、爽太だけを見ていたわけではなく、爽太とその隣に座っている葵を一緒に見ていた。

（フフフ。この二人がやっぱり一番ＣＰに向いてるよ）

そんな様子の瑞輝に爽太が口を開ける。

「まず俺が駄目だと思ったのが、キャラの説明。年齢、身長は良いとして、趣味と特技なんていらない。それに血液型も。そんなものこれから役に立つかも分からんしな」

「ふむふむ。でもそれがなきゃ説明不足にならない？」

「容姿の説明を入れればいいんだよ。例えば、爽太の髪型は甘く、滑らかでツヤのある黒いショートヘアをしている。顔は子猫のように可愛いが、その裏にツン……」

爽太は何かを言いかけた途端に、「ゴホンッ」と咳払いをして話をやめた。　多分、虎の説明につられたのだろう。

「まぁつまり、これから先で必要になるものだけを説明すりゃいいんだよ」

「はーい」

爽太の右隣に座っている虎が手を上げる。

「容姿なんて挿絵で十分だと思いまーす。もしくは表紙とか」

「うん。その方が説明は省けるね。あとは性格などで十分だし。どう？　爽太くんわ」

「いや、普通に無理でしょ。誰が挿絵なんて描くの？　つかそんな余裕なんてないからね？　セリフ考えるのにどれだけ時間掛かってると思ってるの？」

瑞輝は何のことか分からないことを言われて茫然とする。虎も同じだ。　すると、爽太は失敗したという表情を浮かべて話を逸らす。

「と、とにかく挿絵は無理だ！」

「え～。いい案だと思ったのになぁ……」

「それじゃあ次。僕が一番気になったのは、腐男子の説明を省いたところかな」

「ああ、それは俺も思った」

瑞輝の意見に爽太も同意する。

隣りで聞いてる虎は、なぜだ！という表情を浮かべていた。

「腐男子。簡単に説明すると、男の人が、二次元世界の男×男のＬＯＶＥシーンを好む人のことを言うんだよ」

「つまり、虎と同じでいわゆるホ〇っていうこと？」

「おま、人のこと言えねぇだろ！」

二人の会話に虎が割り込む。

「ううん。中にはそういう人もいるけど、付き合うなら女性とじゃないと駄目って人もいるよ」

「つか俺がそれを省いた理由わな、大人の事情が多発すると思って、敢えて俺たち未成年者を気遣ったわけだ」

虎は腕を組み始め、自分の話に納得するように頷く。それを無視するように爽太は周囲を見回して口を開く。

「ところで奈乃葉はどこ行ったんだ？」

「さっき怒って飛び出していったよ」

「なんか悪いことしたな」

「まぁ男だけにしか分からないことだよね」

「いや、多分男でも一部の人にしか分からないと思う」

「……」

会話がなくなり、辺りは沈黙に包まれる。

これは、一番あってはならないパターンではないのか？

しかし瑞輝は、爽太と葵の二人を見つめる。

（やっぱ、この二人ヤバス。ツンキャラにクールイケメンて最高すぎっしょ！　もう鼻血が出そう……）

「どうかした？」

気になった爽太がそう口にする。

「え？　い、いや。なんでもないよ。なんでもないからね！　ちょ、ちょっと僕トイレ行ってくる！」

すると瑞輝は鼻を押さえながら駆け足で部屋を出て行った。

「俺もちょい用足してくるわ」

そばにいた虎も部屋を後にした。

「それじゃあこの間の語り手は俺……？」

「……」

辺りが沈黙と化す。

二人だけとなった部屋。爽太は今ものすごく緊張しています。心臓の鼓動が抑えられませんっ！

そう。隣りに枇榔葵というモデルにも負けないくらいのイケメンがいるからです！

「あ、葵はどう思ってんの……？」

緊張している中、爽太は枇榔葵に声を掛けましたっ！

「ん？　なにが？」

葵は読んでいた本を閉じ、甘く優しい声で爽太に訊く。

バクバクバクバク。

その声を聞いただけで、爽太の脈が上がり始めた。

「あ、いやその……。虎の……せ、説明？！」

「んー。俺途中から入ってきたからなー。ただ、爽太が言った加賀山の説明は面白かったかな」

葵はそう口にすると、爽太の方に顔を向けて、笑みを浮かべる。

爽太はすぐに顔を逸らし、別の話題へ切り替えた。

「あ、てか、俺たちの部活名がベーコンレタス部って何なんだろうね。ははっ」

（なに言ってるんだオレェェ！　しっかりしろっ！）

「いいんじゃないか？　俺は気に入ってるかな。部名」

枇榔葵が気に入ってる部名。ベーコンレタス部――。

その由来は、瑞輝が考えたもので、ベーコンレタスバーガーという腐の者にしか分からない用語があるらしい。よく街角で見かけるマク〇ナルドの品物ではないという。

ベーコンレタスバーガー。ベーコンレタスB。ベーコンレタス部となったわけだ。うん、適当だ。そしてもっとも重要なところ。略してBL部ということだ。

BL。つまり、ボーイズラブ。この部活はボーイズラブ部ということだ。話の初めで虎の説明した”性質”というのは、つまりそういうこと。

今ならまだ間に合うと思うから言うけど、そういうのが苦手な人は曲がれ右してくれ！

「あっ」

突然、葵がそう口にして爽太は吃驚する。

「そういえば最後の”この部活で起こるさまざまな物語が”ってのが気になったな」

「え？　あぁ。そういえばそう語ってたね。何なんだろう……」

爽太は葵の言った言葉の意味を考える。

ま、虎が戻ってきたら本人に直接聞けばいいか。

こうして俺たちの反省会は終わり、新たなストーリーへ進むのであった。

俺、語り手向いてないわ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9343z/

俺たち、ベーコンレタス部！

2011年12月29日04時47分発行